

公益事業レポート 2014

記念 第4回 長寿環境の竹子賞 記念 第4回 長寿環境の竹子賞



遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞 授賞



「すべての人びとの いのちと環境のために」



すべての人びとのいのちと環境のために

当財団は、平成25年4月1日に一般財団法人東京顕微鏡院に移行しました。これまで財団法人東京顕微鏡院(旧財団)が行ってきた諸事業を引き継ぐとともに公益目的支出計画に則って公益事業を実施し、これにより「健康な命」と、それを支える「生活環境衛生」の維持・向上・増進を目指し、もって社会福祉に貢献することを目的としています。

新制度下において、「一般財団法人に移行した法人は、これまで法人内部に留保した財産(公益目的財産)を、自ら定めた公益目的支出計画に基づき、本来の目的である公益目的に使用すること」が義務付けられています。当財団の公益目的支出財産額は約2,345百万円であり、毎年度52百万円を46年間にわたって支出する計画です。

一般財団法人移行2年目を迎えて

平成26年度は、移行後2年目となります。平成23年3月11日の東日本大震災以降、輸入食品等の命令検査の検査命令解除による受託数の大幅な減少や、同業他機関との競合激化等、財団の事業運営にとって極めて厳しい状況が続いている。当財団では、厳しい事業環境が当面は継続していくものとの認識を持つつ、平成27年度も事業の立て直し及び運営の効率化を図り、総力を挙げて、

事業にまい進することを目指しています。

上述した事業環境変化を鑑み、平成26年度は法人事業運営とのバランスを図ることとし、核となる公益目的事業を絞り込み、36,160千円を支出する計画で執り進めました。

7年目を迎えた遠山椿吉賞

平成26年度の遠山椿吉賞は、食と環境の科学賞としては4回目となります。グローバルに拡大しつつある大気汚染の課題へのご功績に、また、奨励賞として、新たな微生物モニタリングの研究成果ならびに今後の発展に期待し、2名の方々を顕彰させていただきました。選考委員の先生方の、本賞の主旨に対する真摯な思いと厳正なる審査の賜物であります。公衆衛生と予防医療にまい進する研究者に光をあてる顕彰制度として、わが国に根付きつつあることを感じ、改めて当財団の創業者、遠山椿吉博士に心からの感謝を捧げたいと思います。

山田和江賞の創設

遠山椿吉賞創設の背景には、戦後10年間中断した事業を、非常な困難を経て再建し、今日に至る当財団ならびに医療法人社団こころとからだの

元氣プラザの事業と精神の礎を改めて築いた2人の経営者、故山田匡蔵元理事長と故山田和江名誉理事長の存在およびその献身的貢献があることを忘れることはできません。

平成26年享年103歳で逝去された名誉理事長の50余年の功績を記念し、平成27年度より、50歳未満の応募者に対してその優秀な研究成果を顕彰し、更なる発展を奨励する目的で「山田和江賞」を設け、毎年1名に、賞状および賞金50万円を贈呈し、顕彰することとなりました。

衛生指導を復興支援に

未曾有の被害を及ぼした東日本大震災から4年が経ちましたが、今も尚、被災地の復興には支援が必要とされています。当財団は復興庁が主催する地域復興マッチング「結の場」に本年度も参加し、被災地企業のニーズに応えて衛生管理講習会等を開催し、平成27年度も協働・共創に向けた関係づくりに努めています。

健やかなこころとからだのために

働き世代の方々には健康セミナー、メンタルヘルスセミナーを継続し、広く普及啓発のため講演録も出版いたしました。また、次世代の育成と

しては、当財団豊海研究所で職員の指導による「夏休み子ども研究者体験セミナー」を継続しています。

いのちと環境のために

本年4月1日、124周年を迎えたわけですが、事業環境は大きく変化しています。「健全な生活環境」を追求する東京顕微鏡院と、「健康なこころ」と「健康なからだ」を追求する元氣プラザ両法人の一体経営により、将来にわたり、“健やかないのち”的維持、向上、増進を追求し続けたいと思います。

平成27年5月

一般財団法人 東京顕微鏡院 理事長
医療法人社団 こころとからだの元氣プラザ 理事長



山田匡通

復興支援 (復興庁「結の場」)

“衛生管理は企業の生命線”—被災地の産業復興のために

東日本大震災と福島原発事故から平成27年3月11日で4年が経ちました。死者、行方不明者、関連死を含めて2万人を超える方が被害に遭い、4年目の今も尚、全国でおよそ22万9千人が避難生活を続ける状況にあります。

当法人は、食品衛生法に基づく厚生労働大臣登録検査機関として、HACCP・食品衛生相談に経験豊富な専門者を擁し、企業・団体等の衛生管理に貢献しています。そのノウハウを役立てていただく、当法人の復興支援活動をご紹介します。

■衛生管理を食品製造業、水産加工業の活力に

当法人は、本年度も営業開発部、食品安全サポート部、公益事業室が協働し、復興庁 地域復興マッチング「結の場」ワークショップに参加しました。

東日本大震災で被災した東北沿岸には水産加工業が多くあります。当法人は、被災企業のニーズを深く知ることで協働・共創に向けた関係づくりに努め、食品衛生法に基づく厚生労働大臣登録検査機関としてのノウハウを生かし、復興支援を継続しています。

平成26年8月18・19日 「結の場」HACCP研修会(宮古)
12月9日 「結の場」ワークショップ 福島県南相馬
平成27年 1月22日 「結の場」ワークショップ 宮城県多賀城
2月5日 「結の場」ワークショップ 岩手県大船渡
2月13日 「結の場」ワークショップ 宮城県気仙沼

●復興庁では、被災地域の企業が抱える多様な経営課題の解決を図るために、大手企業等が、技術、情報、販路などを幅広く提供する支援事業の形成の場として「地域復興マッチング『結の場』」を実施しています。

■講師派遣

平成26年1月29日の「結の場」(宮古)を契機に、同年8月18～19日、『地域復興マッチング「結の場」HACCP研修会』(主催:復興庁・東京顕微鏡院・宮古商工会議所)が現地で開催され、地元水産企業10社11名が参加しました。当法人は、講師2名を派遣して食品衛生管理等講習会と個別加工場の衛生点検を実施し、実践的な衛生知識の啓発に努めました。



■今後の展開

「結の場」で顕在化した要望に合わせて講習会等を企画開催し、継続的な支援を行う予定です。

根拠となる
経営資源

質の高い公益目的事業を可能とする、経営資源は人材です。これまで当法人食と環境の科学センターが行ってきた、HACCP・食品衛生相談の活動実績をご紹介します。

- ・ 東京都食品衛生自主管理認証制度の指定審査機関(認定実績:魚介類販売業、豆腐製造業、弁当・総菜製造業、給食)。
 - ・ 高速道路上のサービスエリア等へHACCPシステム導入支援(導入実績:全国260施設)。
 - ・ コンビニエンスストアで扱う弁当、惣菜等の製造工場におけるHACCP認定審査機関(認定実績:180工場)。
 - ・ アメリカHACCP視察研修ツアーの企画運営
- (参加企業:水産食品、保健所、コンサルタント、卸売、ゼネコン等。視察場所:魚介類加工場、食肉加工場、スーパーマーケット、病院給食、レストラン)。
- ・ 企業対象の食品衛生相談活動実績多数。

■ワークショップ参加

本年度に参加した「結の場」は、左記の通りです。多賀城では、衛生管理に従業員の意識改革を求める声も聞かれ、大船渡では、養殖場におけるカキのノロウイルス対策やHACCP取得に関心が寄せられました。気仙沼では、製造食品の輸出を検討する参加者もあり、衛生管理やHACCP取得に熱心な意見交換を行いました。

「結の場」多賀城



被災地域

於宮城県多賀城市文化センター



「結の場」大船渡



旧商工会議所

於岩手県大船渡プラザホテル



盛土工事

「結の場」気仙沼



被災地域

於宮城県気仙沼ホテル観洋



防潮堤工事

学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当法人創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。授賞式では、賞状、記念品、副賞100万円を授与し、記念講演およびレセプションを開催しています。



遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞

平成26年度は、食品の安全と感染症、生活環境衛生を重点課題としました。食品やヒト媒介微生物、残留化学物質、天然有毒・有害物質、食品添加物、食物アレルギー、器具・容器包装などに関する調査研究やこれらの分析法の開発、食品中の放射能汚染など、食品の安全に関わるもの、シックハウス、アスベストやダニ、カビなど室内環境、大気汚染、ビル衛生、飲料水の安全性、水と感染症の問題など生活環境衛生にかかるものを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

本賞は、地道に社会への貢献を追及する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞



新田 裕史 (にった ひろし)

独立行政法人国立環境研究所
環境健康研究センター センター長

「環境疫学手法によるPM2.5等の大気汚染物質の
健康影響の評価に関する研究」

副賞 100万円

遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞 奨励賞



山口 進康 (やまぐち のぶやす)

大阪大学 大学院薬学研究科
衛生・微生物学分野 准教授

「real-time on-siteモニタリングによる生活環境における衛生微生物学的安全の確保」

副賞 50万円

応募の推進策

7回目を迎える本賞の応募を積極的に呼び掛けようと、2つの改善を行いました。

- ・全国の大学関連学部学科へ応募書類の発送
- ・募集時に「50歳未満の応募者に奨励賞を設け、本賞以外に顕彰する場合がある」旨を告知

選考の過程

2014(平成26)年2月から学会等120媒体に資料を送付し、57の媒体等を通して募集告知をはじめ、また日本全国の大学関連学部学科300ヶ所に応募案内を送り、6月末には15件のご応募をいただきました。



選考プロセスは、一次審査・選考委員会という2つのステップで進めました。一次審査では、15件すべての応募論文を、各選考委員に個別に目を通してくださいこととし、5つの評価軸(①公衆衛生への貢献度、②研究・技術の独自性、③技術の普及の可能性、④社会へのインパクト、⑤推薦したいテーマと思うか)で五段階評価を付けていただきました。集計した評価票は各委員に事前に読んでいただき、選考委員会では本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を重ねて受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論を踏まえ、当法人・医療法人合同の経営会議で、お二方の授賞が決定しました。

2月

「遠山椿吉記念 第4回
食と環境の科学賞」広報
ホームページ掲載

4月 公募開始

15件 応募
——
6月末日 締め切り
(7月～9月 選考プロセス)

9月 選考委員会

10月 経営会議で決定

2月
授賞式・記念講演会
レセプション



創業者 遠山椿吉（とおやま ちんきち）

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年東京医科大学撰科に入學し、衛生学および微生物学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顯微鏡院の前身である東京顯微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顯微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顯微鏡』『東京顯微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顯微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日逝世。享年71歳。

2月17日 遠山椿吉賞授賞式

「遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2015(平成27)年2月17日(火)にホテルメトロポリタンエドモント(東京・飯田橋)にて開催されました。授賞式には、選考委員の先生方を始め、研究者、報道関係者ほか当法人関係者など、およそ100名が祝福に集まりました。

山田理事長は、まず、学識経験豊富な一流の選考委員の先生方が、厳正な審査に携わっていただいていることに謝辞を述べ、選考委員各位を紹介し、心からの敬意を表しました。

続いて、新田氏の長年にわたる大気汚染のご研究成果について、「国際的に高い評価を得たと共に、わが国の大気汚染防止対策の立案や環境基準設定などに大きく貢献された」と、深い敬意と共に祝辞を述べました。山口氏のご研究については、「微生物のモニタリングに、非常に新しい手法を開発された」と、感銘の意を表し、一般に知ることの少ない、公衆衛生向上にまい進される研究者のご貢献に、光をあてることができる喜びを語り、創業者、遠山椿吉博士に感謝を捧げました。そして「新田先生、山口先生、ご臨席の皆様のますますのご活躍・ご健康を心より祈念申し上げましてお祝いの言葉とさせていただきます」と、結びました。

平成27年度は、「遠山椿吉記念 第4回 健康予防医療賞」を選考顕彰いたします。

■受賞者あいさつ

遠山椿吉賞 新田裕史氏

この賞はわが国における衛生学の先達の1人であります遠山椿吉先生の業績を記念したものであり、衛生学から派生したとも言える環境疫学の研究者として、この上ない喜びでいっぱいです。選考委員の先生方ならびに東京顯微鏡院の関係の皆さんに、心より御礼を申し上げます。

すべての仕事において、同僚や仕事相手なしには何事も成し遂げることができないと同様に、研究においても職場の先輩、同僚等の支援、多くの共同研究者の協力がなければ、研究成果を得てそれを世に発信することはできないわけです。学術の世界でも、スポーツの世界でも、このような晴れがましい場で、受賞者は仲間や家族に対する感謝を述べるということが通例でございますけれども、環境疫学の場合にはまさしくすべてが共同作業、チームとしての研究であります。私の業績とされましたすべてが共同作業のたまものであります。共同作業に関わった多くの研究者を代表して、この賞をいただいたものと考えております。

私は大学院時代からほぼ一貫して、大気汚染の健康影響に関する疫学研究に従事してまいりました。ただ、私の研究業績には、誰も気が付かないような大気汚染物質の健康影響を発見したというような、はなばなしのものは全くないといつてもいいかもしれません。一般的に健康影響が疑われているような大気汚染物質につきまして、現実の人々を対象としてその影響の程度、具体的な内容を明らかにしたというものです。自分自身では、有意義な面白い研究分野であると思っておりますが、ある意味非常に地味な研究分野でございます。このような環境疫学の分野に注目していただいたことにつきまして、重ねて感謝を申し上げ、私の受賞が環境疫学を目指す若い研究者の励みになれば、これ以上の喜びはございません。本日は誠にありがとうございました。

*平成27年度「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」授賞式について、詳細は、当法人ホームページをご覧ください。

●撮影協力:今澤 剛

日記念 第4回 食と環境の科学賞



山田匡通理事長より新田裕史氏に遠山椿吉賞を授与



山口進康氏に
遠山椿吉賞奨励賞を授与



受賞記念講演:新田裕史氏



受賞記念講演:山口進康氏

遠山椿吉賞奨励賞 山口進康氏

私は現在、環境微生物分野で、見えない微生物を可視化する、バイオイメージングの研究に携わっております。私が実際にミクロの世界に出会ったのは、小学生の頃です。両親に簡単な顯微鏡を買ってもらい、水槽の中の水草を観察したとき、目に見えない世界があることを知りました。それ以来、顯微鏡観察にのめり込み、ミクロの世界を知る喜びを実感いたしました。

大学では微生物を研究対象とする現在の研究室に分属し、大学生・大学院生時代を通じて、顯微鏡を用いる研究に携わってきました。当時はまだ珍しかった蛍光顯微鏡で、蛍光染色した細菌を眺めてみると、宇宙と同じような光景がミクロの世界にもあり、ミクロの顯微鏡の世界とマクロの宇宙のつながりを感じました。

私は子供の頃より星空を眺めることも非常に好きで、夜空を見ては宇宙の広さを実感しており、宇宙に関係する仕事に就きたいと考えてきました。蛍光顯微鏡との出会いから、環境微生物学分野に進みました。縁あって現在、国際宇宙ステーションの微生物モニタリングに関する研究に従事しております。

ですので、私は自分の経験から、学生には常々「夢を持つことを大事に」と伝えており、「夢を持ち続けていれば、いつかかなえるチャンスが来る」という話をしております。彼らの夢がかなうように役立ちたいという思いで接しています。

今回の業績につきましては、私個人の力では決してありません。御指導いただきました先生方、先輩、一緒に研究を進めてくれた後輩、すべての方々のご協力の賜物と実感し、あらためて感謝しております。

また、今回の受賞にあたり、両親が非常に喜んでくれました。小さい頃から私に色々なことを学ぶ環境を与えてくれた両親に、今回の受賞で少し恩返しができたかと、ありがたく思っております。今回は栄誉ある賞をいただき、本当にありがとうございました。

●山口進康氏の受賞記念講演録は、『月刊HACCP』平成27年6月号(株)鶏卵肉情報センター発行)に転載されました。



◆選考委員長講評

柳沢 幸雄

選考委員長、東京大学名誉教授

本年度は、重点課題である「食の安全」「生活環境衛生」の応募が15件に増え、質量ともに充実した内容だったと評価できます。

選考は、書類審査、選考委員会という2つのステップで実施しました。審査に際しては、本賞の趣旨と今年の重点課題を確認し、7名の選考委員全員が、個別に応募書類を5つの軸で5段階評価し、全員の審査票を集計した資料は予めよく読んで、選考委員会に臨みました。

選考委員会では、まず、15件の応募の中で特に高い評点を得た4件を、全員の合意のもと慎重に審議し、次に賞の目的という観点で受賞に適合するか否かを意見交換し、最後に改めて本賞の趣旨を確認して議論を行い、最終結論は投票によって決めました。

結果、新田裕史氏を遠山椿吉賞に、また山口進康氏を奨励賞に推薦することにいたしました。

新田先生は、環境疫学に一貫して取り組んでこられた研究者です。PM2.5および黄砂等の越境大気汚染による健康影響に関する疫学研究を、複数の研究機関の研究者と実施して、その中心的な役割を担ってこられました。PM2.5はアメリカにも基準がありますが、統計的手法でデータをまとめ上げ、わが国の環境基準を出されたことは、国際的にも高く評価されております。大気汚染の測定とそのモデル構築等を通して、健康被害への影響を推測し、行政施策に結び付けてきたところは、非常に大きな貢献だったということができます。

山口先生は生菌を迅速にその場(リアルタイム、オンライン)で検出できる蛍光活性染色法を開発されました。新たな衛生微生物管理法、微生物モニタリングとして、水環境分野、医薬品や食品製造分野、また宇宙ステーションにおける展開も視野に入れた、極めて可能性の大きな研究であるということができます。奨励賞研究課題の実施例が積み重なり、将来、素晴らしい成果として本賞につながることを、強く期待しております。

選考委員長として選考の過程を振り返りますと、この遠山椿吉賞の意義を非常に強く感じます。

公衆衛生や予防医療は、個人個人の先見的な発想力や、社会的使命に基づく地道な研究を必要としますが、基礎医学などとは異なり研究者個人に光が当たることが非常に少ない分野であることは否めません。この遠山椿吉賞が今後とも多くの優れた研究者の業績に光をあて、その偉業を公に称えることで、次世代を担う後進の育成につながれば、誠に幸いであると思います。



高橋利之副理事長による開会の挨拶



選考委員長の柳沢幸雄先生による講評



◆来賓祝辞〈抜粋〉

中井 里史

横浜国立大学大学院 教授、
一般社団法人室内環境学会 理事長

(前略)おそらく公衆衛生とは、科学的知見・研究を集めて、より良い生活環境へ向上させていくような研究領域が多いのではないかと思います。(中略)

ただ、環境、特に今回授賞対象となった、大気の研究については少し違う側面もあって、環境基準の設定や、公害健康被害補償法に関する、どちらかというと行政的な対応にも充分関わっていかなければいけません。(中略)

そのためには、工学の方、理学の方など、あるいは環境基準等々の話になりますと行政の方なども含めた形で、いろんな対応を取っていかなければいけない研究領域と考えられると思います。(中略)

このようなことはなかなか大変な作業で、全然分野の違う人の集まりですので、まず言葉が通じない、考え方方が違うというところを新田先生にまとめていただいたことが、われわれとしては非常に助けになった、ありがたかったと存じます。



◆来賓祝辞〈抜粋〉

倉 文明

国立感染症研究所 主任研究官

(前略)生活に身近な環境、循環式浴槽や冷却塔、修景水の普及により、水を介した呼吸器感染症が増えてまいりました。(中略)

ご存じのように、レジオネラ属菌は培養では増殖が遅いので、迅速検査が求められています。われわれはレジオネラ属菌に特異的な遺伝子迅速検査法のほかに、ATP測定、フローサイトメトリーで従属栄養細菌の菌量を測定して、レジオネラ汚染率を予測して、環境水の衛生管理をする方法を提唱しています。(中略)

そのような環境微生物の迅速検査の分野で、山口先生は先駆的な方法を開発され、多くの論文を発表され、マイクロ流路デバイスを用いたオンライン・モニタリングを提唱されています。現在は蛍光抗体を用いた検出ですけれども、今後レジオネラ属菌の検出をさらに改善され、良い装置をご提供していただきたいと思います。今後のますますの研究のご発展を祈念いたします。

*授賞式の詳細は当法人ホームページをご覧ください。



故山田和江 名誉理事長
(1912~2014)

山田和江賞の創設

平成26年に享年103歳で逝去された故山田和江名誉理事長・医師の、50余年にわたるご貢献を記念し、平成27年度より、50歳未満の応募者に対し、その優秀な研究成果を顕彰するとともに、研究の更なる発展を奨励する目的で「山田和江賞」を設け、毎年1名に、賞状および賞金50万円を贈呈し、顕彰することとなりました。

平成27年3月、遠山椿吉賞内規を改訂しました。

普及啓発 (食と環境のセミナー)

身近な食や環境の問題について

当法人では、企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーを、昭和51年よりおよそ40年にわたって開催しており、最先端の食や環境の情報提供に努めています。平成26年度は、毎年繰り返すノロウイルス食中毒に積極対応するため、新たな試みとして事前対策セミナーを開催しました。

食と環境のセミナー

◆10月17日

第86回 食と環境のセミナー「毎年繰り返すノロウイルス食中毒予防への積極的対応」

(会場:日本橋社会教育会館 参加者数:193名)

「ノロウイルス食中毒の現況と対策並びに今後の課題」

講師:野田 衛(国立医薬品食品衛生研究所 食品衛生管理部 第四室長)

「ノロウイルス食中毒防止のための従業員対策」

講師:伊藤 武(当法人理事)

ノロウイルス食中毒は、例年、事件数・患者数とも多く、原因食品もカキなどの二枚貝のほか食品従事者が関与したと推察される調理食品が多いのが特徴で、これまでの細菌性食中毒の予防対策と異なる対応が求められています。

そこで本年は、ノロウイルス食中毒シーズンに先立ち、食品従事者が食品にノロウイルスを汚染させないために何をすべきか、という視点で実践的なセミナーを行いました。ノロウイルス食中毒の撲滅は、ノロウイルス感染症と密接に関連することから感染症対策の推進強化が求められています。



野田衛先生の講演



伊藤武理事の講演

■「食品と環境」衛生講座シリーズ①

「食品従事者必携:

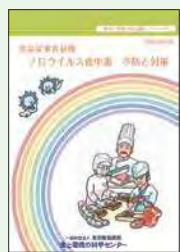
「ノロウイルス食中毒 予防と対策」

27年度版を発行

ノロウイルス食中毒の対策に、幅広く活用いただける実用書です。好評につき、最新情報を織り込み、27年度版として発行しました。(監修:伊藤 武)

発行日:平成27年3月(初版:23年2月、改訂:25年2月)

サイズなど:A5判32ページ 発行部数:1,000部 備価:200円



根拠となる 経営資源

質の高い公益目的事業を可能とする、当法人食と環境の科学センターの活動の一端をご紹介します。

日本食品微生物学会への支援



第35回日本食品微生物学会学術総会
平成26年9月18-19日、大阪府立大学中百舌鳥キャンパス

当法人は、1989(平成元)年4月より26年間事務局を担い、同学会の発展に貢献しております。

「食品の微生物および寄生虫に関する学術研究の推進、並びにその成果の普及を図り、食品の安全および機能の向上に寄与すること」を目的とする同学会は、会員数は個人・法人を含め約1200を有し、企業・研究機関・行政のいわゆる産官学で構成されています。

同学会では学術総会のほか全国各地で学術セミナーを開催し、会員のみならず消費者や食品関連業務従事者に、食品微生物の正しい知識や衛生管理の最新情報を啓発しています。

日本カンピロバクター研究会への支援



第7回 日本カンピロバクター研究会総会

当法人は、2011(平成23)年度から事務局を務め、細菌性下痢症の最も主要な病原菌である本菌の研究者や食中毒・感染拡大防止に取り組む方々の学際的な研究を支援しています。

第7回カンピロバクター研究会総会(参加:70名)は、平成26年12月11~12日、国立医薬品食品衛生研究所講堂にて開催いたしました。特別講演は、同研究会世話人を務める当法人伊藤武理事が行い、国内のカンピロバクター研究の足跡を振り返りました。

NPO法人食の安全を確保するための 微生物検査協議会への支援

2014(平成26)年11月27日、「食品製造におけるHACCPの重要性」と「ノロウイルス」をテーマに、同NPO主催による通算10回目の研修会(参加:188名 会員93名、一般95名)が日本橋公会堂で開催されました。当法人伊藤武理事は、同NPO法人10名の理事のうち副理事長を務め、食の安全のため普及啓発活動を行っています。

また、同NPO法人は、食中毒関連微生物の適切な検査方法検討の一環で、「食品からのウエルシュ菌検査マニュアル専門委員会」(委員長:伊藤武)を進めています。

ATP・迅速検査研究会への支援

2015(平成27)年2月19日、第32回講演会(参加:70名)が月島社会教育会館で開催され、同研究会会長を務める当法人伊藤理事が基調講演を行いました。同研究会は食品衛生における迅速検査技術向上を目的として平成11年に発足し、15年にわたり活動しています。

地域貢献 (次世代の育成)

次世代を担う子どもたちへ

平成18年より始めた「夏休み子ども研究者体験」セミナーも、9年目を迎えました。本年度も120周年を機に交流の深まった創業者遠山椿吉の生誕地、山形県山辺町と連携し、山辺町の子どもたちのセミナー参加枠を設けました。サイエンスを学ぶ楽しさ、食品の安全性や健康に関心を持つきっかけとして、次世代を対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

■平成26年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー

白衣を着て、手についた菌や食べ物の中の菌、食べ物に含まれる色を観察しよう!

- ◆Aコース:7月31日(木)~8月1日(金)
- ◆Bコース:8月7日(木)~8日(金)
- ◆会場:豊海研究所 4F 会議室・実習室
- ◆参加人数:31名
- ◆講師・協力:調査研究室、食品微生物検査部、食品理化学検査部

◎後援:東京都中央区教育委員会 ◎協力:山形県山辺町教育委員会 ◎参加校:中央区立小学校12校、山辺町立山辺小学校

本年度は新たに、手を洗う前と後では、ATPふき取り検査(汚染物質(=ATP量)を高感度に測定する検査)で、数値がどれだけちがうのか自分の手で実験して調べました。

手に付着している菌を調べるために、各自、手を洗う前と洗った後の手を培地につけ、それぞれ孵卵器で24時間培養(35℃)し、菌数の違いを調査しました。

また、着色料をテーマにペーパークロマトグラフィーという分析法で、チョコレートから色素を抽出し、合成着色料について学び、天然色素を使った実験では、紫キャベツから取り出した「紫色」と、カレーに使われる香辛料のターメリックから取り出した「黄色」を利用してリトマス試験紙を作り、身の回りの食品が酸性かアルカリ性かを調べる実験にも取り組みました。

二日目の体験学習では、豊海研究所内の様々な食品検査の様子も見学しました。



平成26年度「夏休み子ども研究者体験」セミナープログラム

参加者より「学校ではできない実験がたくさんできてとても楽しかった。自分の手についている菌が予想以上に多くてびっくりした。また、いつか機会があればやってみたい」「身边にあるものでたくさん実験ができると知った。実験が楽しくなった。」などの感想が寄せられました。



A日程には山辺小学校の皆さん
が参加し、町を代表して山辺の紹介を各自
発表しました。



研究者体験で
楽しく学んだB
日程の皆さん。



本年度もAコースに山辺小学校から6年生児童4名の特別参加があり、研究体験を通して交流を深めました。多数の希望者から選抜されて参加した皆さんには、帰郷後、9月19日に山辺小学校5・6年生157名に研究体験の報告会を行いました。



創立141周年・山辺小学校での報告会
会場となったホールには、山辺の偉人、遠山椿吉博士の写真
が掲示されています。

■地元中学生の校外学習に協力



微生物による食中毒について学習出題で、食中毒予防の3原則および、製造・販売・消費する人の立場で3原則の違いを学んだ後、検査現場を見学しました。

帰校後、クラスメートにアンケートを行うと、食中毒の症状や対策についての知識不足が明らかになりました。生徒たちは菌の

平成26年11月7日、九段中等教育学校総合学習「都市と環境」の一環で、5名の1年生が豊海研究所を訪れました。8年目となる今年の課題は「微生物による食中毒はなぜおきるか」。食品微生物部難波豊彦部長の



難波部長の先導で検査現場を見学



学習成果発表の模様

特徴や、食品によって発生しやすい菌・ウイルスについて詳しく調べ、平成27年2月13日(金)、豊海研究所を再訪問して学習成果を発表。「食中毒の生きた知識が得られた」と、感想を述べていました。

3月には学校内で、学習発表会が開催されたとのことです。

普及啓発 (メンタルヘルスセミナー)

働く人たちのこころの健康づくり

メンタルヘルス対策は、ほとんどの企業における大きな課題です。昭和60年より職域のメンタルセミナーを推進してきた当法人は、120周年を機に、平成23年より実践型メンタルセミナー企画を立ち上げました。折しも東日本大震災が発生したことから、「すべての人が『頑張り』続けられること」を主題として、職場のメンタルヘルス領域で新しい観点から議論を展開しました。3年間の実績を踏まえて、本年度は、新たに「個人にアプローチする一次予防」をテーマに実施しました。

近年、いきいき職場(ワーク・エンゲージメント)という概念が注目されています。

本年度は、「心の基礎体力を上げる」課題に、会場参加型で、踏み込んだ議論を行い、昨年度に続き、これからの時代に求められるメンタルヘルス問題の一次予防の可能性を模索しました。

セミナーには人事・産業保健の担当者が多く参加し、参加率、基調講演・パネルディスカッションの満足度共に約9割と、多くの共感を得ることができました。

折しも、ストレスチェックが法令で義務化(平成27年12月施行)となり、セミナー参加者からは「周囲の職場環境を整えるだけでは限度があることが良くわかり、個人の対応能力を上げる重要性を改めて認識した」「社員教育に使えそうな内容が多く含まれていた」など、行動を起こすヒントとなったようです。

◎企画会議メンバー：

森 晃爾 (産業医科大学産業生体科学研究所教授、産業医実務研修センター長)

白波瀬丈一郎 (慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室特任准教授)

吉川 徹 (公益財団法人労働科学研究所 副所長)

坂本宣明 (当医療法人 産業保健部 医師)

松浦真澄 (東京理科大学専任講師 臨床心理士)

座長:及川孝光 (当医療法人 統括所長)

◎平成26年度コーディネーター：白波瀬丈一郎

◎参加者数:98名

◎参加費:1,000円

◎総合司会:森 晃爾、吉川 徹

■オープニング

「平成23年度からの本プロジェクト全体の報告」

森 晃爾



■基調講演:

「職場で高める『心の基礎体力』～メンタルタフネスの概念を産業保健において捉え直す」
白波瀬丈一郎



■パネルディスカッション:

●「働く人のメンタルタフネス研修の事例」
樋口 穂(株)ルネサンス 健康経営チームマネージャー)

●「産業医として面談時に感じた『心の基礎体力』とは」
坂本宣明(当医療法人 産業保健部 医師)

●「臨床心理士として個人の『心の基礎体力』アップの事例」
松浦真澄(東京理科大学 専任講師、臨床心理士)

●指定発言

「職場環境づくりの観点から」

吉川 徹



エクササイズ療法「シナブソロジー」を、参加者全員で体験(樋口先生)

●フロアを交えての意見交換



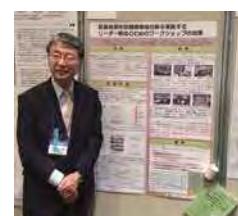
パネリストの先生方:
白波瀬丈一郎、樋口穂、
坂本宣明、松浦真澄
(写真右から)
敬称略



司会の森晃爾先生、吉川徹先生
(写真右から)

■学会発表

第87回日本産業衛生学会(平成26年5月21日～24日)に、「職場環境改善」をテーマとしたセミナー・ワークショップの取組み(平成25年度開催)について発表を及川統括所長が行いました。



ポスター発表には多くの方が熱心に聴き入り質問もありました。

※発表ポスターは、当法人ホームページで公開しています。

■次のステップ

平成27年度は、4年間の知見を生かし、企画会議とセミナーを開催する予定です。

※メンタルセミナーの講演録は当法人ホームページで公開しています。

■メンタルヘルスセミナー

人事・労務管理スタッフ、メンタルヘルス推進担当者、衛生管理者、医師、保健師・看護師等の皆さんに役立つ実践セミナー

◆みんなで“頑張れる”ための 「心の基礎体力を高めるメンタルヘルスセミナー」

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定

◎日時:平成26年10月29日(水)13:30～16:30

◎会場:御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター

根拠となる
経営資源

質の高い公益目的事業を可能とする、当法人・医療法人の活動の一端をご紹介します。

公益事業メンタルヘルスセミナーの始まり

当法人は、1985(昭和60)年、健診の企業顧客担当者の提案を機に、東京大学医学部精神衛生学教室教授(当時)佐々木雄司医師の指導でプログラムを構築し、公益事業として企業担当者向けにメンタルヘルス講演会を開催。健診機関として、早くから事業所外EAPに取り組む発端となりました。

「こころの健康相談室」

翌1986(昭和61)年、受け皿として「こころとからだの相談室」を開設し個別相談を始めました。2008(平成20)年に特定健診・保健指導事業開始に伴い、「こころとからだの相談室」は、「こころの健康相談室」に名称変更し、産業保健活動との連携を強化して、今日に至っています。

普及啓発 (健康セミナー)

働き盛りからの予防医療の普及開発

1994(平成6)年より「働く人の健康増進セミナー」を7回開催、「働く人の健康教育講座」を15回開催するほかシンポジウムも多数開催してきました。
2008(平成20)年からは、『健康日本21*』に基づく健康セミナーシリーズを展開。「健康寿命の延伸」や「生活の質の向上」に役立つ講演会を企画しています。企画は、当法人・医療法人の職員が公益委員を務める公益会議で広く意見を傾聴し、時代の先を見て組み立てるよう努めています。

*21世紀における国民健康づくり運動

■ 健康に関するセミナー

◎シリーズ『働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり』第17・18回

◆9月16日「働き世代から始める、健康長寿に向かた食とからだづくり～老化予防とメタボ予防の視点から～」

(参加者数:270名)

会場:文京シビックホール 小ホール

講師:新開省二(東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長)

オープニング:高築勝義(当医療法人 名誉所長)

司会:村松秀樹(当医療法人内科医、認定産業医、日本体育協会公認スポーツドクター)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定



中高年の人の中には、摂取カロリーは過剰なのに、栄養バランスが悪いため低栄養になる人も多いと言われています。近年、長年の高齢者研究から、働き世代以降の低栄養が、脳卒中や心臓病に代表される血管病に影響することが判ってきました。また、筋肉は40代以降、何もしなければ、少しずつ減少すると言われていますが、握力や歩く速さといった運動能力が高齢期の虚弱化と密接に関係することも研究で判ってきています。

今回のセミナーでは、数々の高齢者研究の成果から見えた、働き世代から始める健康寿命を延ばすための食生活改善や体づくりを、老化予防とメタボ予防の視点からわかりやすく紹介しました。



村松秀樹先生(左)の司会で参加者の質問を元にディスカッション
(講演内容を、講師の先生方のご理解・ご協力により、小冊子に編集しています⇒P13)

◆12月8日「働き世代から始める、禁煙とCOPD対策～COPD予防と治療の最前線」(参加者数:152名)

会場:東医健保会館

講師:別役智子(慶應義塾大学医学部内科学教室 呼吸器内科 教授)

講師:金澤 實(埼玉医科大学病院病院長 呼吸器 内科教授)

オープニング:及川孝光(当医療法人 統括所長)

司会:鈴木恒雄(当医療法人理事 呼吸器内科医、日本内科学会内科専門医、日本呼吸器学会指導医)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定



別役智子先生の講演
「予防医学の最前線—喫煙による健康への影響やCOPDの早期発見」

喫煙者が多くみられるCOPDは、2005年度統計では約550万人の潜在患者がいると推計されていますが、そのうち治療を受けている患者数は5%足らずといわれています。症状がさらに進行すると呼吸不全や心不全を起こす命に関わる病気ですので、早期発見、早期治療が重要です。



金澤 實先生の講演
「COPDの病態と治療—合併症の怖さをご存知ですか?」

セミナーでは、予防医学の最前線から別役先生に禁煙・受動喫煙の健康影響や早期発見のポイント、治療の最前線から金澤先生に最新の治療法をお話しいただきました。



鈴木恒雄先生(右端)の司会で、参加者の質問を元にディスカッション

根拠となる経営資源

質の高い公益目的事業を可能とする、当法人・医療法人の活動の一端をご紹介します。

公益委員・両法人役職員の協力

私たちの公益事業は、当法人・医療法人各事業部門の代表として理事長通達で任命された公益委員と、公益事業室スタッフにより公益会議で討議され、役員をアドバイザーとして、一丸となって実施しています。

◇平成26年度公益事業委員(五十音順)

◎東京顕微鏡院:平賀真基(食品安全サポート部)、

小林恵美(衛生検査管理部)

◎こころとからだの元氣プラザ:沼畠瑞穂(医療技術本部検査部)、青木利弘(健康づくり営業部)、

菅頭淳(総合健診事業部)

セミナー等の開催には、両法人職員と公益事業室が運営を担っています。



循環器健診事業

当法人は、東京大学医学部の疫学調査の一つとして実施されてきた循環器系健康診断を継承し、1967(昭和42)年に健診事業を開始。以来、疫学調査の「追跡とフォロー」の思想と手法を当法人の健康診断事業の思想として、予防医学と普及啓発に取り組んできました。

早期発見、早期治療への仕組みづくり

開始当時から当法人の健診事業は、勤労者を対象にスクリーニング(一次健診)を実施し、結果を元に、脳血管疾患、心疾患、糖尿病など疑われる疾患ごとに精密検査(二次健診)を行い、「早期発見から早期診断、早期治療へ」フォローし、翌年度はデータを追跡し食習慣等の指導を加えるというものです。

勤労者全般の健康管理が循環器系疾患予防対策に的を絞ったのは、1972(昭和47)年の労働安全衛生法以降です。

健診後の保健指導

当法人が、健診後のフォローとして保健指導に本格的に取り組み始めたのは、1970年代のことと、栄養指導、健康相談(昭和51年より)や体力測定(昭和52年)も実施してきました。

更に医師・保健師・管理栄養士・健康運動指導士を中心に効果が得られるプログラム作りに努め、2008(平成20)年に特定保健指導が法制化された後も、引き続き質の高い保健指導に努めています。

普及啓発 (女性セミナー)

女性の健康づくりについて

当法人では、女性特有のがん検診を1974(昭和49)年に導入して以来、女性の健康づくりのため予防医療と普及啓発に取り組んできました。2001年に創立110周年記念シンポジウム「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を、2003年に女性のための生涯医療センターViVi創設1周年記念シンポジウム「アダムとイブの医療革命」を開催。2012(平成24)年度からは、毎年3月の「女性の健康週間*」に、女性の健康に関する啓発活動を継続しています。

*毎年3月1~8日に展開する国民運動

■女性の健康に関するセミナー

◎シリーズ『元気に働き、人生を楽しむ女性の健康講座』第3回

◆3月4日「働く女性のハッピーライフマネジメント～仕事と妊娠・出産・子育てを両立させるために！」

(参加者数:171名)

会場:飯田橋レインボービル 7階大会議室

講師:荒木葉子(荒木労働衛生コンサルタント事務所長、産業医・内科医)

講師:小田瑞恵(当医療法人 理事・産婦人科医)

特別講演:吉村泰典(内閣官房参与、慶應義塾大学名誉教授)

オープニング:及川孝光(当医療法人 総括所長)

司会:大村峯夫(当医療法人 理事 婦人科部長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本産科婦人科学会、日本生殖医学会、日本女性医学学会、日本女性心身医学会、日本臨床細胞学会

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定



小田瑞恵先生の講演
「婦人科のかかりつけ医を持とう」

吉村泰典先生の特別講演
「女性のからだと卵子の老化」

荒木葉子先生の講演
「これから女性のヘルシーキャリア・マネジメント」

*『女と男のディクショナリー』
『HUMAN+』(日本産科婦人科学会刊)を当日配布。

女性が元気に働き、人生を楽しむため大切な3つのテーマ、労働衛生の視点から荒木先生より「女性のヘルシーキャリア・マネジメント術」、婦人科医の視点から小田先生より「働く女性の健康管理とかかりつけ医としての婦人科の役立て方」、特別講演として吉村先生より「出産適齢期と卵子の老化」について、それぞれわかりやすくお話しいただきました。

後半は、参加者の質問を元に活発なディスカッションを展開しました。



大村峯夫先生(右端)の司会で、参加者の質問を元にディスカッション

■「LOVE49」活動を支援

細胞検査士会は市民の会と連携して子宮頸がん検診の啓発を行っており、社内の細胞検査士の職員も2009(平成21)年から参加しています。本年度は上野で街頭キャンペーンを行いました。



日頃、顕微鏡下でがん細胞を探す職員が、街へ出て子宮頸がん検診受診を訴えます。

■HPを通じピンクリボン運動を実施

乳がんは、早期発見、早期治療により90%以上の方が治ると言われますが、30~50歳代の女性のがん死亡原因のトップであり、今も、罹患率、死亡率ともに増加しています。当法人・医療法人もホームページを通して、検診受診を呼びかけるピンクリボン運動を行いました。

根拠となる 経営資源

質の高い公益目的事業を可能とする、当法人・医療法人の活動の一端をご紹介します。

子宮がん・乳がん検診

当法人は1974(昭和49)年、初めて子宮がん検診・乳がん検診を行い、1980(昭和55)年からは本格的に乳がん検診を開始しました。

*国の施策では、1982(昭和57)年度子宮頸がん検診、1987(昭和62)年視触診による乳がん検診が導入。

早期発見、早期治療への仕組みづくり

当法人子宮がん検診は、当初から、内診、細胞診、コルポスコープ診を実施し、受診当日の追加検査体制を整備し、細胞診の結果を再検査につなげるフォローアップ体制も構築しました。1985(昭和60)年、経腔超音波検査を導入し、4種類の検査を組み合わせる、当法人子宮がん検診の基本形が構築されました。2008(平成20)年「婦人科相談コーナー」を開設し、婦人健診で所見のある方に経験豊富な助産師・看護師が相談等を行っています。

精度へのこだわりとホスピタリティ

1980(昭和55)年当時からマンモグラフィ装置を導入し、乳がん検診の追加検査に活用しました。2004(平成16)年に厚生労働省から検査基準が示されてマンモグラフィ検査は急増しており、2013(平成25)年は27,893件を実施しました。

「マンモグラフィ認定施設」である当医療法人では、女性の放射線技師が検査を担当しています。

病理学的検査を法人内で

1993(平成5)年、法人内で細胞診検査を開始し、2010(平成22)年からは細胞検査士10名体制となり、2013(平成25)年には91,687件(うち子宮頸部は76,790件、子宮体部は1,321件、乳腺は433件)の細胞診検査、1,614件(うち婦人科は642件、乳腺科は42件)の病理組織検査を行っています。

出版関連

健康情報の普及および啓発、活動の情報開示

予防医療の普及啓発のため、講演内容を平成20年度から継続して小冊子で発刊しています。メンタルセミナー講演録、遠山椿吉賞記念講演録、公益事業レポートは発刊すると共に、当法人ホームページでバックナンバーからご覧いただけます。更に、両法人共催の公益事業活動を広くお知らせしようと、新たに当医療法人ホームページに「社会貢献活動」を設けました。

■働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり⑯⑰

「人生80年時代の健康づくり」セミナーを読みやすい小冊子にまとめました。⑯では、自覚症状のない高血圧の予防法として、家庭血圧測定、生活習慣、食事法、運動のコツなど。⑰では、長年の高齢者疫学研究データに基づき、中高年期・老年期で異なる、健康新寿命を延ばすための食生活改善・体づくりを紹介しています。



新刊 発行日:⑯平成26年6月 ⑰平成27年3月 サイズ:A5判 ページ:⑯46ページ ⑰52ページ 発行部数:各1,000部 頒価:各350円

- ⑯「働き世代に潜む“サイレントキラー”高血圧対策！」
戸尾 七臣（自治医科大学内科学講座 循環器内科学部門 主任教授）
栗原由美子（こことからだの元気プラザ 循環器内科医）
⑰「働き世代から始める、健康長寿に向けた食とからだづくり～老化予防とメタボ予防の視点から～」
新開 省二（東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長）

※当法人ホームページよりご購入いただけます。

■平成26年度メンタルヘルスセミナー企画 講演録

本年度のメンタルヘルスセミナーを、講師の先生方のご理解、ご協力をいただき、講演録として発刊いたしました。過去3年間の取組みを踏まえて、平成26年度は、メンタルタフネス、レジリエンスといった概念を産業保健において捉え直し、「心の基礎体力を高める」という課題に、踏み込んだ議論を会場参加型で行いました。

変化する時代に求められる、メンタルヘルス問題の一次予防の可能性を模索します。人事・労務管理やメンタルヘルス推進担当者、産業保健従事者などに役立つ実践的な内容です。

企画委員会アドバイザー：森 晃爾（産業医科大学産業生態研究所 教授、
産業医実務研修センター長）
座長：及川 孝光（当医療法人 統括所長）



「みんなで“頑張れる”ための
『心の基礎体力』を高めるメンタルヘルス」
コーディネーター：白波瀬丈一郎
(慶應義塾大学医学部 精神・神経学教室 特任准教授)

新刊 発行日:平成27年3月31日
サイズなど:A4判、53ページ
発行部数:1,000部

※当法人ホームページでも公開しています。

■遠山椿吉賞受賞記念講演 講演録

両法人の『事業年報』を発刊し、公益事業として遠山椿吉賞受賞記念講演の講演録を掲載しました。



新刊 発行日:平成26年8月30日
サイズなど:A4判(講演録:29ページ)
CD-ROM付属
発行部数:1,000部
配布先:契約先、関係行政機関、
関係研究機関、関係団体など

第3回 健康予防医療賞

「医療費評価を通じた医療保険者の保健事業の質向上に関する研究」
受賞者 岩山 明（公益財団法人 結核予防会第一健康相談所 所長、
生活習慣病予防研究センター長）

第3回 健康予防医療賞 特別賞

「日本人の糖尿病診断基準に関する疫学研究—ブドウ糖負荷試験の経年観察データに基づく—」
受賞者 伊藤 千賀子（医療法人グランドタワー メディカルコート 理事長）

第3回 健康予防医療賞 奨励賞

「感染症流行のリアルタイム分析と疫学動態の定量化」
受賞者 西浦 博（東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻国際保健政策学 准教授）

※当法人ホームページでも公開しています。

■公益事業レポート2013



公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。ステークホルダーの皆様に対して、当法人・医療法人の公益事業の情報開示に役立てられています。

新刊 発行日:平成26年5月29日
サイズなど:A4判 16ページ
発行部数:2,000部

※当法人ホームページでも公開しています。

■ホームページの充実

平成23～26年度メンタルヘルスセミナーの講演録、公益事業レポート2007～2013、平成21～25年度遠山椿吉賞受賞記念講演録をデジタル化し、公開しました。

(東京顕微鏡院HP TOP >公益事業 >公益事業の活動報告)
(東京顕微鏡院HP TOP >遠山椿吉賞 >過去の受賞者)

また、当医療法人のホームページに、「社会貢献活動」を新設し、両法人一体として推進している公益活動内容を開示しました。
(元気プラザHP TOP >当法人について >社会貢献活動)

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業 ～3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き	【戦 前】	普及啓発活動、出版、その他公益活動 など
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始	1800年～	『結核黒菌簡便検査法』出版
病原的黒菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売	1891(明治24)年	
細菌検査の実務指導を行う講習科を開講	1892(明治25)年	「顕微鏡」第1号
名称を東京顕微鏡院と改称	1894(明治27)年	(1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、1944(昭和19)年戦時統制令で休刊するまで50年間発行
種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	1895(明治28)年	機関誌「顕微鏡」第1号発行
飲料水の検査を開始	1896(明治29)年	啓蒙用幻燈映画製作
母乳検査を開始	1899(明治32)年	「顕微鏡の祖」マルビギー200年記念式典、本院にて挙行
事業拡大にともない、神田区小川町に移転	1900年～	コレラ講習会を開催
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任せられる、ペスト試験室を新設	1903(明治36)年	回帰熱講習会を開催
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される	1907(明治40)年	ペスト講習会を開催
保健部を新設。広く世間の人びとに對し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始	1908(明治41)年	上水協議会(日本水道協会の前身)(1904年(明治37年)) 遠山椿吉の呼びかけで設立
遠山椿吉院長、東京市参事会より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる	1914(大正3)年	来日したコッホ博士を囲む生花の会(於帝国ホテル) 前列左からロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士、後列左から2人目が遠山椿吉
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を嘱託(翌年帰国)	1915(大正4)年	
遠山椿吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる	1922(大正11)年	「結核征伐の歌」
(院長、長年来の研究による)脚気治療薬うりひんを製品化	1923(大正12)年	遠山椿吉院長、来日したロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士を招待し、生花の会を開催
創立30周年記念祝賀会	1927(昭和2)年	「結核予防善惡鑑」発行、「結核征伐の歌」を発表
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失。9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、10月1日一般業務を再開	1928(昭和3)年	
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1929(昭和4)年	『人生の意義と道德の淵源』出版。天皇に献上
遠山椿吉、肺がんのため遠逝享年71	1930(昭和5)年	脚気の無料診療を開始
レントゲン深部治療開始	1935(昭和10)年	第1回脚気無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)
創立50周年記念式典(1940年)	1945(昭和20)年	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
戦災により、以後10年にわたり事業中断	【戦 後】	
遠山正路院長より事業を継承	1954(昭和29)年	
診療所を開設、細菌検査所を再開	1955(昭和30)年	
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始	1967(昭和42)年	
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大	1972(昭和47)年	
東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1974(昭和49)年	
建替えによる新院舎完成。人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録	1975(昭和50)年	「小笠原健康な村づくり事業」(1978年～)
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設	1976(昭和51)年	
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1978(昭和53)年	離島村民の健康管理を目的とした「小笠原健康な村づくり事業」を開始 「小児ぜん息母親教室」、食品衛生セミナーなどを開催

歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)
創立者(院長) 遠山 椿吉	1891~1928年	第3代(院長) 細谷 省吾	1955~1957年	第5代(理事長) 山田 匡蔵	1967~1989年	第7代(理事長) 下村 満子	1995~2007年
第2代(院長) 遠山 正路	1929~1954年	第4代(院長) 高橋 悅三	1957~1967年	第6代(理事長) 山田 和江	1989~1995年	現理事長	山田 匡通 2007年~

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益活動など	
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)	1979(昭和54年)		
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61年)	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」を開催	
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62年)	学術普及誌「健康と環境」創刊(~2000年)	
簡易専用水道検査 (1979年~)	1991(平成3年)	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」を開催	
	1992(平成4年)	シンポジウム「ペイブリッシュフォーラム'92 —21世紀への対がん戦略」を開催	
		平成4年度より事業年報の発行開始	
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設 (2001、2002、2005年に順次拡大)	1996(平成8年)		
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1997(平成9年)	シンポジウム「新時代の高血圧管理」「職場と住宅環境を考える」などを開催	
会員制人間ドックを開始	1998(平成10年)	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」 「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催	
	2000年~		
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大	2001(平成13年)	創立110周年記念日米メディカルシンポジウム 「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催	
トータルヘルスセンターBe-Well!!、 女性のための生涯医療センターViViを開設	2002(平成14年)	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」を開催	
医療部門を統合・拡充し、 医療法人社団こころとからだの元氣プラザを設立	2003(平成15年)	女性のための生涯医療センターViVi 開設1周年記念シンポジウム 「アダムとイフの医療革命」を開催	
こころとからだの元氣プラザ (2003年~)	2005(平成17年)	東京顕微鏡院創立115年、こころとからだの元氣プラザ創立3年 記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催	
立川研究所を一ヶ所に統合拡大	2007(平成19年)	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来 —なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催	
こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)と市ヶ谷本院の施設再配置	2008(平成20年)	遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設	
こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)外来診療と 女性のための生涯医療センターViViを統合	2009(平成21年)	「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、 同奨励賞を川崎晋氏に授与	
こころとからだの元氣プラザ、アジュール竹芝総合健診センターの運営を受託	2010(平成22年)	遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム「東京の水の源流を探る ～豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水～」を開催	
臨床検査部がこころとからだの元氣プラザの組織に移行		「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、 同特別賞を中村雅一氏に授与	
三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2011(平成23年)	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、 同特別賞を小泉昭夫氏に授与	
3月11日 東日本大震災により、 創立120周年記念式典・祝賀会、創立120周年記念顧客イベント中止		創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・ 予防戦略―研究・治療・ケアの最前線から」を開催	
4月1日 創立120周年	2012(平成24年)	「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を白木正孝氏、 同特別記念賞を久山町研究グループ 代表 清原裕氏に授与	
創立120周年記念年頭式 (2012年~)		「遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞」を小西良子氏、 同功労賞を石川哲氏に授与	
豊海センタービル竣工		「創立120周年記念誌」を刊行	
日本橋研究所が施設拡充に伴い、豊海研究所に移転	2013(平成25年)	「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」を岡山明氏、 同特別賞を伊藤千賀子氏、	
4月1日に財団法人東京顕微鏡院は一般財団法人に移行、 「一般財団法人 東京顕微鏡院」と名称変更		同奨励賞を西浦博氏に授与	
[ISO/IEC 17025:2005]を認定取得(放射能試験)	2014(平成26年)	「遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞」を 新田裕史氏、同奨励賞を山口進康氏に授与	
登録衛生検査所「元氣プラザ細胞病理コアテクノロジー」がスタート			
[ISO/IEC 17025:2005]を認定取得(食品試験:理化学、微生物)			
	2015(平成27年)		

「遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞」
(右:新田氏 左:山口氏)

Our Credo 私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

＜顕彰制度＞

*遠山椿吉記念 第4回 健康予防医療賞顕彰
(告知、応募論文募集、選考委員会開催、
授賞式・記念講演・セレブレーション開催、講演録作成)
*遠山椿吉記念 第5回 食と環境の科学賞(平成28年度)準備

＜セミナー・シンポジウム＞

*健康セミナー
-生活習慣病テーマ
-メンタルヘルステーマ
-女性の健康テーマ
*食と環境セミナー

＜出版＞

*企画出版
講演録



＜次世代育成＞

*夏休み「子ども研究者
体験」セミナー

＜その他＞

*公益事業レポート

2015(平成27)年度 公益事業計画

発行:

一般財団法人 東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 <http://www.kenko-kenbi.or.jp/>

医療法人社団 こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 <http://www.genkiplaza.or.jp/>

問合せ先: 三橋 祥江 制作: 水戸 純一、飯島 敏樹 デザイン: 金沢 謙児

2015.5.29 発行